

思い出はみず色の故郷に

ふるさと
うた
北原白秋・わが心の詩
西本鶏介・作 藤沢友一・絵



PHPこころのノンフィクション発刊のことば

このシリーズは、さまざまな分野で理想を追い求め、勇気と情熱をもって懸命に生きた人々の姿を、事実をもとに描くものです。私たちに人生のすばらしさを語り、生きることのよろこびを与えずにはおかない数々の魂の軌跡、それを、次代をになう子どもたちにひろく伝えたいと念願しております。

NDC 916 西本鶏介
思い出はみず色の故郷に
PHP・こころのノンフィクション⑧
1981 PHP研究所
168P 22cm
にしもと けいすけ

思い出はみず色の故郷に

昭和56年12月31日

第1刷

著者 西本鶏介

画家 藤沢友一

発行者 江口克彦

発行所 PHP研究所

〒601 京都市南区西九条北ノ内町11

電話 075(681)4431 <代表>

東京事務所 03(295)9211

印刷・製本 大日本印刷株式会社

© 1981 Keisuke Nishimoto & Tomoichi Fujisawa Printed in Japan.

乱丁・落丁本はご面倒ですが弊所出版部宛お送り下さい。送料弊所負担にてお取り替え致します。

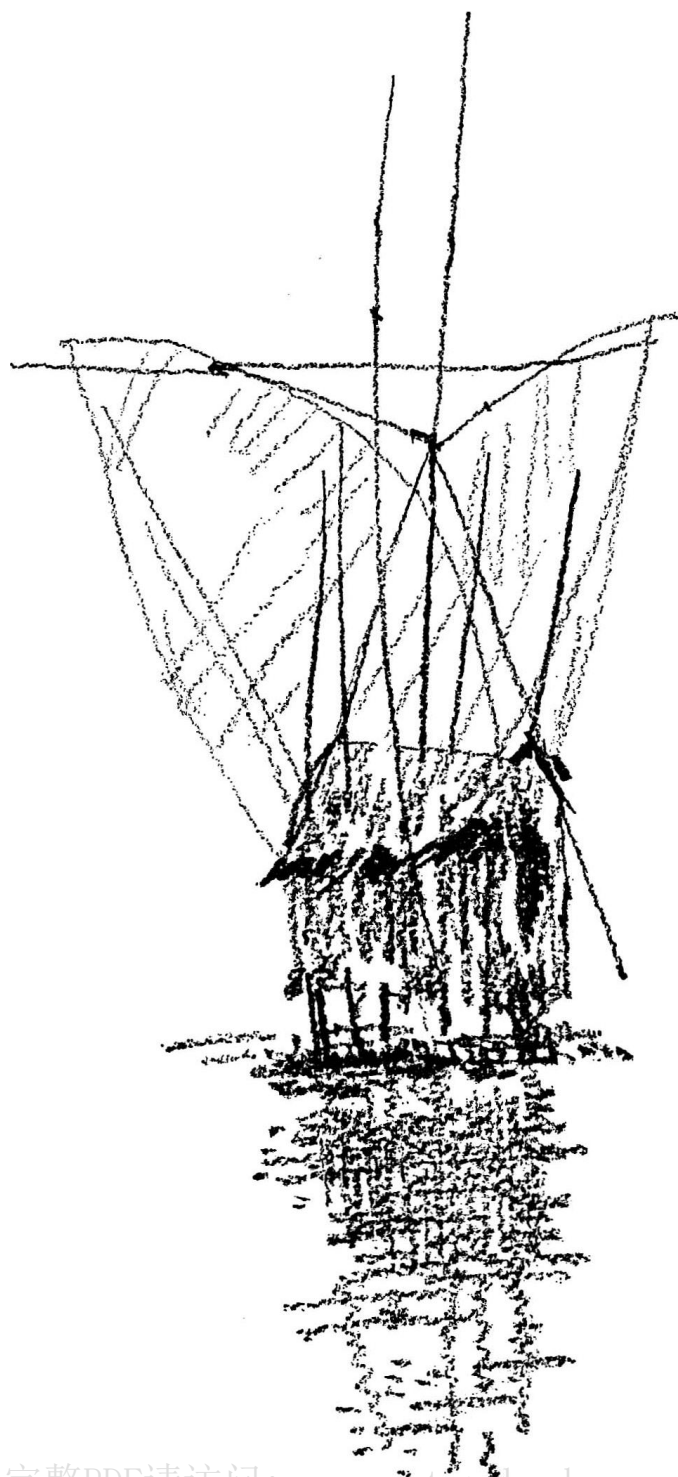
思い出はみず色の故郷に

北原白秋・わが心の詩

西本鶏介・作 藤沢友一・絵



もくじ



水路のくも手綱

故郷を思う心 8

水底のもう一つの国 16

柳川のびいどろびん 27

ウオタア・ヒアシンスの花 37

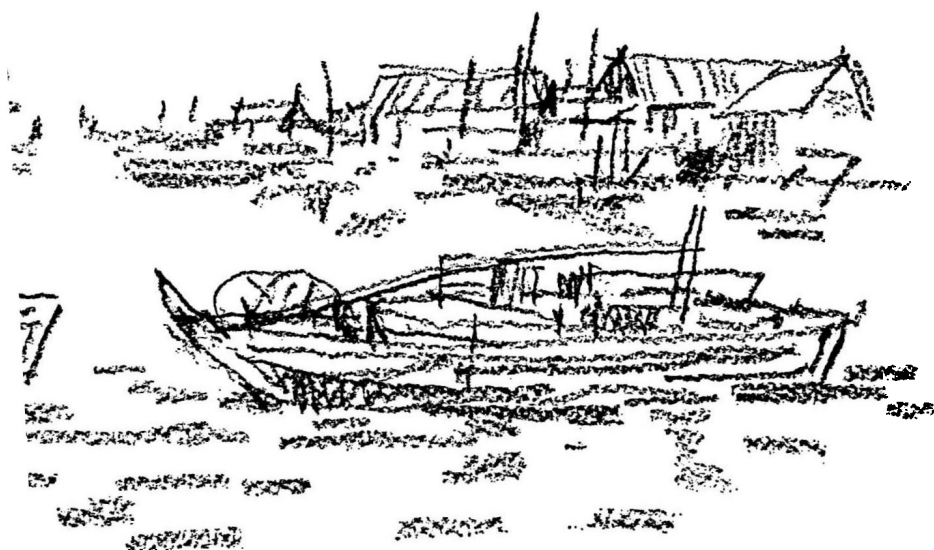
からたちの白い花 46

トンカ・ジョンとチンカ・ジョン

どこかに敵のいて 64

勉強のできるガキ大将 71

熱くなったボール 81



まぶしい文学雑誌

88

酒倉に火がついた

95

はじめて新聞にのった短歌

102

かなしい父のすがた

111

赤いたんぼの道

120

さよなら故郷の町

131

新しい詩歌の時代

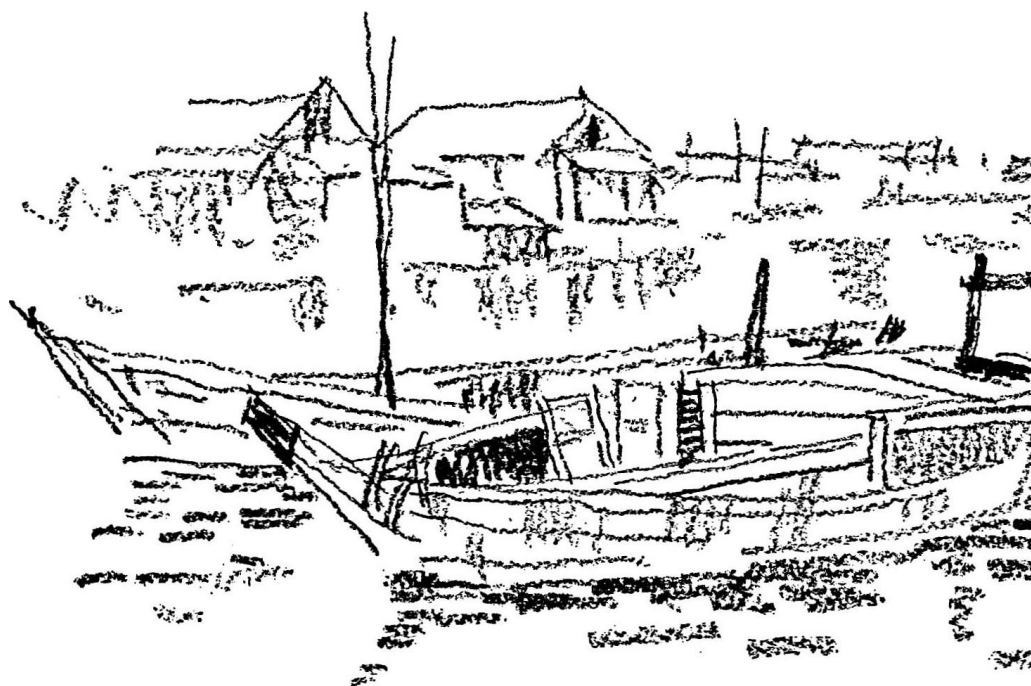
142

柳川をおとずれた日

153

あとがき

162



著者・西本鶏介(にしもと・けいすけ)

1934年奈良県生まれ。国学院大学国文科卒。児童文学評論や民話研究のかたわら文教大、実践女子短大などで児童文学を講ずる。主な評論集に『空想と真実の国』『児童文学名作のふるさと』民話集に『たのしい笑い話』『日本昔話集』絵本に『そらとぶこいのぼり』『つるになったきつね』『ねこでよかった』などがある。

現住所 〒193 八王子市めじろ台4-22-5

画家・藤沢友一(ふじさわ・ともいち)

1922年小樽市に生まれる。東京美術学校（現芸術大学）日本画科卒業。自由美術家協会会員、アート・クラブ会員を経て、現在フリー。絵本『走れクラウス』『さよならよざえむさん』『人形の家』、著書『太陽の絵筆』などの作品がある。

現住所 〒153 目黒区中目黒1-1-65-307

思い出はみず色の故郷に^{ふるさと}



「故郷を思ふ心」

人はだれでも故郷を持つてゐる。故郷というのは、自分が生まれ、そだった村や町のことだ。故郷はゆたかな自然にめぐまれた田舎だけにあるのではない。ビルがたちならび、自動車のはげしく行きかう都会も、そこで生まれ、そだった人にはたいせつな故郷である。

きみたちが、いつかおとなになった時、故郷の思い出は、お母さんのようなやさしさで、きみたちをつつみこんでくれるだろう。たとえ、故郷を遠くはなれてくらそうとも、子ども時代のできごとは、故郷の景色とともに、いつまでも心から消えることがないのだ。

この道はいつか来た道、

ああ、そうだよ、

あかしやの花が咲いてる。

あの丘おかはいつか見た丘、

ああ、そうだよ、

ほら、白い時計台だよ。

これは北原白秋きたはらはくしゅうのつくった「この道」という童謡どうようである。きみたちにだって、いつか来た道、いつか通った道の思い出はあるはずだ。そこには、どんな花がさいいて、どんな建物たてものがたっていただろうか。

赤んぼうの時、乳母車うばぐるまの中から見た景色、小学生になる前の時、お父さんの肩車かたぐるまの上から見た景色。そっと目をつぶってみるがいい。その景色は一人一人ちがっていて、この童謡のようにいきいきと見えてくるだろう。

ゆりかごのうたを、

カナリヤがうたうよ。

ねんねこ、ねんねこ、

ねんねこよ。

の「ゆりかごのうた」、

赤い鳥、小鳥、

なぜなぜ赤い。

赤い実^みをたべた。

の「赤い鳥小鳥」、

雨がふります。雨がふる。

遊びにゆきたし、傘^{かさ}はなし、

紅緒^{べにお}の木履^{かっこ}も緒が切れた。

の「雨」、このだれもがしている童謡^{どうよう}を書いたのも北原白秋^{きたはら はくしゅう}という人だ。このほか、

「あわて床屋^{とこや}」、「砂山^{すなやま}」、「ペチカ」など、曲^{きょく}がつけられ、いまでも広くうたわれている童謡がたくさんある。日本人なら白秋のうたを一度もうたったことがない、という人はいないだろう。

白秋が童謡を書き始めるまで、学校で教える歌といえば、子どもがほんとうにうたいたくなるような歌ではなかった。ほとんどの歌が、子どもの気もちになってつくったものではなくて、おとなが子どもになにかを教えるための歌だった。

むかしから子どもたちが、まりつきやなわとびをしながらうたうのがわらべ唄^{うた}だ。輪遊^{わあそ}びする時の「ひらいたひらいた」、子とり遊びをする時の「花いちもんめ」のわらべ唄なら、きみたちだつてうたえるかもしれない。

白秋は、このわらべ唄こそ子どものうただと考えた。わらべ唄にはお母さんのお乳^{ちち}のような味がある。なつかしい故郷^{ふるさと}のにおいがある。そんな味やにおいこそが、子どもの心をゆたかにしてくれるのだ。

「よし、ぼくもわらべ唄のような、子どものうたをつくろう。だれもが母のふところで聞いた子もり唄のような童謡をつくろう。」

そう思って、白秋は自分の子ども時代をふりかえり、子どもの気もちになって新し

い童謡をつくった。白秋の童謡をうたったり、聞いたりしていると、おとなまでも子どもの心になってくる。子どもの時にたべたすかんぽのすっぱい味を思い出す。一人でるす番をしていた時のこわいようなさみしいような気もちがよみがえってくる。お母さんに手をひかれて出かけた祭りの日のにぎやかな景色が目にくる。

白秋は、だれよりも自分の故郷を愛していた。子どもの時のできごとや気もちをわすれなかった。白秋の歌も童謡も詩も、みんなこの故郷を思う気もちから生まれた。いいかえると、故郷こそが、このすばらしい詩人をそだてたのである。

きみたちのいま住んでいる村や町も、いつか思い出の故郷になる。おとなになった時、その故郷が、どれほどきみたちにとってたいせつなものであったかに気づくだろう。すばらしい子ども時代、かがやくような子ども時代は、一生に一度しかやっけないのだ。

私（筆者）は白秋の童謡や詩を読むたびに故郷を思い出す。私の故郷は奈良の飛鳥に近い。そこはまた日本の神話の舞台でもある。学校で教わる大むかしの神さまの話も、私にはいますぐおこりそうな本当のできごとのように思えた。目の前に畝傍、耳梨、香具山の、大和三山といわれる山があり、うしろには二上、葛城の山々があつ

た。これらの山は『万葉集』^{まんようしゅう}という有名な歌の本に出てくる山である。

神さまのいた時代、畝傍山は女で、耳梨山と香具山は男であった。ある時、耳梨山と香具山は、畝傍山を自分の奥さん^{おく}にしようとしてけんかした。この話を母から聞いた時、山はいつ人間にかわるのだろうか、毎日ちゅういぶかく山をながめた。でも山はいつもかわらぬすがたのままであった。私にはそれがふしぎだった。

むかし、小子部^{ちいさこべ}栖^す輕^{かる}という人が雷^{いかづち}の丘^{かみなり}というところで雷をつかまえたという神話を聞くと、私も雷の丘にのぼり、本気で雷をつかまえてやろうと考えた。

きみたちだって、これと似たような経験^{けいけん}をしたことがあるだろう。魔法^{まほう}つかいのお話を本当のことだと思ったり、いもしないゆうれいをこわがったり。たとえ、ウソの話であっても、本当かもしれないと、胸^{むね}をどきどきさせるのが、子どもの気もちだ。そんな気もちも、大きくなるとともに、だんだんうしなわれていく。でも、そのどきどきした時の気もちは、けっしてわすれることがない。ふしぎに思ったり、こわがったりする気もちが、目に見えない世界を空想^{くうそう}したり、ありえないできごとを考えたりするゆたかな心になっていく。

そのゆたかな心を人一ばい多く持っていたのが北原白秋^{きたはらはくしゅう}であった。白秋は、いった

いどんな子ども時代を送ったのだろうか。白秋^{はくしゅう}にとって故郷^{ふるさと}とはなんであつたのか。なぜ、子どものころの気もちをいきいきとうたうことができたのか。それを、ぜひ考えてほしい。

早くも十代ですい星^{せい}のように登場^{とうじやう}し、昭和十七^{しやうわ}（一九四二）年、五十七才でこの世^よをさるまでの約^{やく}四十年間、白秋は人の魂^{たましい}にひびく作品を書きつづけてきた。その歌や童謡^{どうよう}や詩^しは、これから私たちの心の中で生きていく。ちよくせつ社会のためにつくした人でも、りっぱなおこないをした人でもないけれど、白秋のうたを聞き、詩を読むことによって、私たちはおさない時や少年の時の心が、どれほどかがやかしいものであるかを知ることができる。青春時代^{せいしゆん}の燃える^もような思いが、どれほど、とうとく、美しいものであるかがわかる。

流れるようなことばのひびきと、絵のように見えてくる心の世界。そこには、少年の日のよろこびとかなしみが、みずみずしくうたわれている。どこか、さみしくて泣^なきたくなるような、それでいてうっとりするような気もち、それは、だれもが一度は通りすぎる、おとなになる前の心の中の景色^{けしき}でもある。

この本に出てくる白秋の歌や詩をじっくりと味わってほしい。少しぐらいむつかし

いところがあっても、よく読んでみるがいい。きみたちの心に、きっと新しいなにかが湧いてくる。その新しいなにかが、きみたちを、やさしく、ゆたかな人間にしてくれるはずだ。